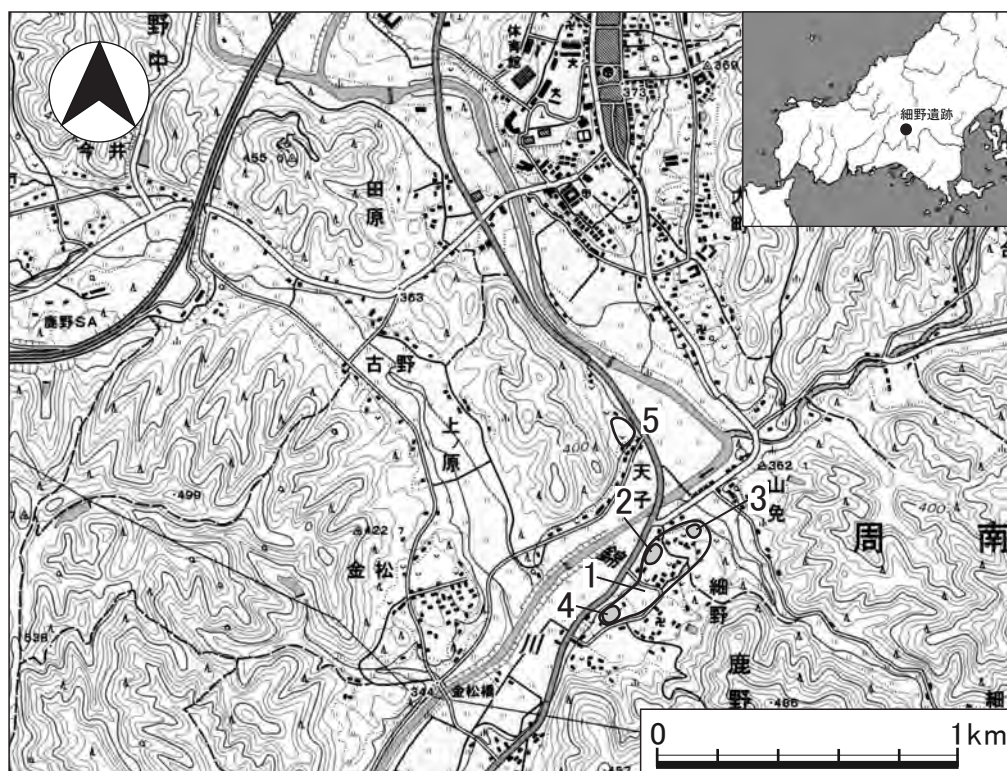


山口県周南市細野遺跡出土の旧石器時代石器

藤野次史・山手貴生

1. はじめに

細野遺跡は山口県周南市に所在する旧石器時代の遺跡で、凝灰岩⁽¹⁾製の石器が採集されている。遺跡は鹿野町在住の宮本公胤氏によって発見された。発見年は不明であるが、本遺跡の近くに位置する天子遺跡出土遺物の紹介を行った1988年当時には旧石器時代の遺跡として確認されており、縄文時代の遺物に交じって、槍先形尖頭器など、旧石器時代と考えられる石器がわずかに採集されていた(藤野1988)。その後も宮本氏によって継続的に遺物の採集が続けられ、旧石器時代の遺物が着実に追加されていった。旧石器時代



第1図 細野遺跡の位置と周辺地形

(1. 細野遺跡、2. 旧細野遺跡第1地点、3. 旧細野遺跡第2地点、4. 旧寺ノ下遺跡、5. 天子遺跡)

の遺物が一定量に達した 2011 年 10 月に宮本氏より細野遺跡出土の旧石器時代石器の公表と寄贈を依頼された。しかし、しばらくして、宮本氏が他界され、石器の詳細な採取場所などを伺わないままとなってしまった。ここに託された石器の報告を行って責を果たしたい。

2. 遺跡の立地と周辺の地形

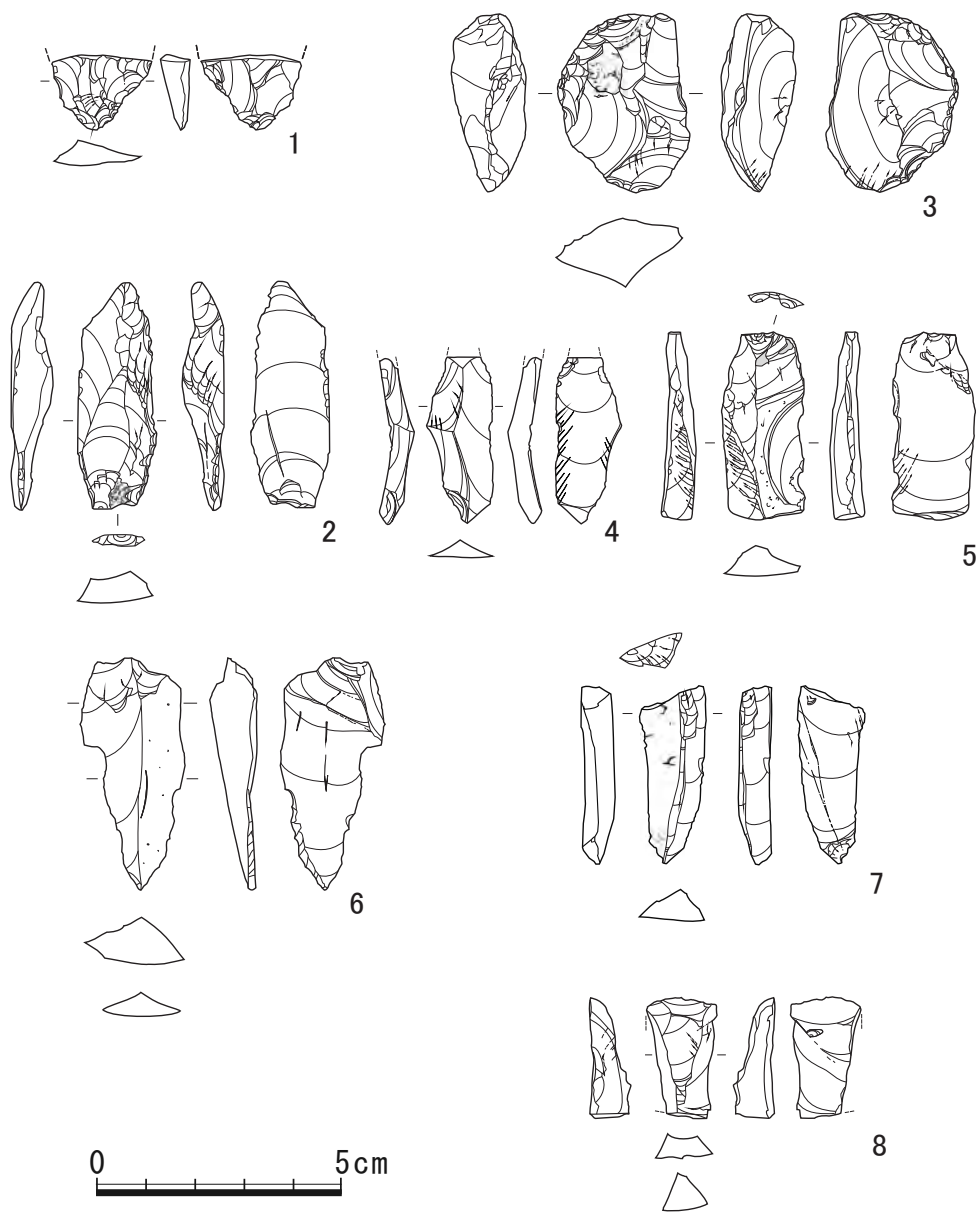
細野遺跡は山口県周南市鹿野下細野に所在し、中国山地の南縁部に位置する。周南市中心部まで直線で約 20 km の距離にあり、瀬戸内海沿岸部までの距離は近いが、水系は山口県西端部で瀬戸内海に注ぐ錦川に属する。細野遺跡が位置する旧都濃郡鹿野町付近は錦川上流部に位置し、中国山地脊梁部から大略南に向かって流下している。沿岸から約 12 km 北側の周南市大道理付近で東に流れを変え、中国山地南縁部を南北に蛇行しながら東流して、岩国市錦町出合で中ノ瀬川と合流して南東方向に流れを変え、岩国市川旭町・日ノ出町で瀬戸内海に注いでいる。鹿野町付近では、錦川水系の他に周南市で瀬戸内海に注ぐ富田川水系、防府市で瀬戸内海に注ぐ佐波川水系の分水嶺が隣接しており、広島県西部の廿日市市吉和（冠高原）や島根県鹿足郡吉賀町六日市（旧六日市町）などとともに、中国山地脊梁部から瀬戸内沿岸部へ抜ける重要な交通の要衝となっている。

本遺跡は旧鹿野町中心部の市街地（以下、市街地）から約 1km 南の河岸段丘上に立地する。錦川は市街地付近では北北西から南南東に向かって流下しているが、本遺跡の北側で大きく南西に流れを変え、直線的に約 2km 南西流した後、南方向に大きく流路を変更している。市街地から本遺跡周辺においては、錦川に、渋川、合ノ川、細ノ谷川、今井川などが順次合流し、比較的広い谷底平野を形成している。また、市街地付近では広い河岸段丘を形成するとともに、錦川とその他の河川の合流地点付近や錦川流路の大きな屈曲部を中心に小規模な河岸段丘が認められ、本遺跡もその一つに立地している。

本遺跡の立地する河岸段丘は、南北約 700 m、東西約 200 m の規模で、ほぼ中央部に東南東から西北西に延びる浅い谷が形成されており、大きく南北に二分される。北側の段丘は、段丘崖側の西半部が標高 250 ～ 260 m で、なだらかに北西に向かって傾斜する平坦部が広がっており、東半部は標高 262 m 前後の一段高い平坦面を形成している。南側の段丘は標高 250 ～ 260 m の平坦部が中心で、一段高い平坦面は山裾を主体に広がるのみである。

元々は段丘北側を細野遺跡（第 1 地点・第 2 地点）、南側を寺ノ下遺跡と呼称していたが、現在は段丘全体を細野遺跡としている⁽²⁾（鹿野町教育委員会 1993）。縄文・旧石器時代の遺物は北側の段丘で採集されている。段丘崖に近い北西部を中心としており、旧細野第

1 地点の標高は 252 m 前後、旧細野遺跡第 2 地点の標高は 258 m 前後で、沖積面との比高差は前者が約 5 m、後者が約 10 m である。本遺跡の現状は畑地であるが、一部は耕作放棄されている。本遺跡の眺望は良好である。中でも旧細野遺跡第 1 地点は東側の段丘裾を細ノ谷川、北側の段丘裾を錦川が流下し、対岸の天子遺跡や錦川と合ノ川の合流点、



第 2 図 細谷遺跡出土の旧石器時代石器実測図 (1)

さらには市街地、合ノ谷川の谷筋などを遠望でき、遺跡周辺の沖積地を広く眺望できる。

3. 出土遺物

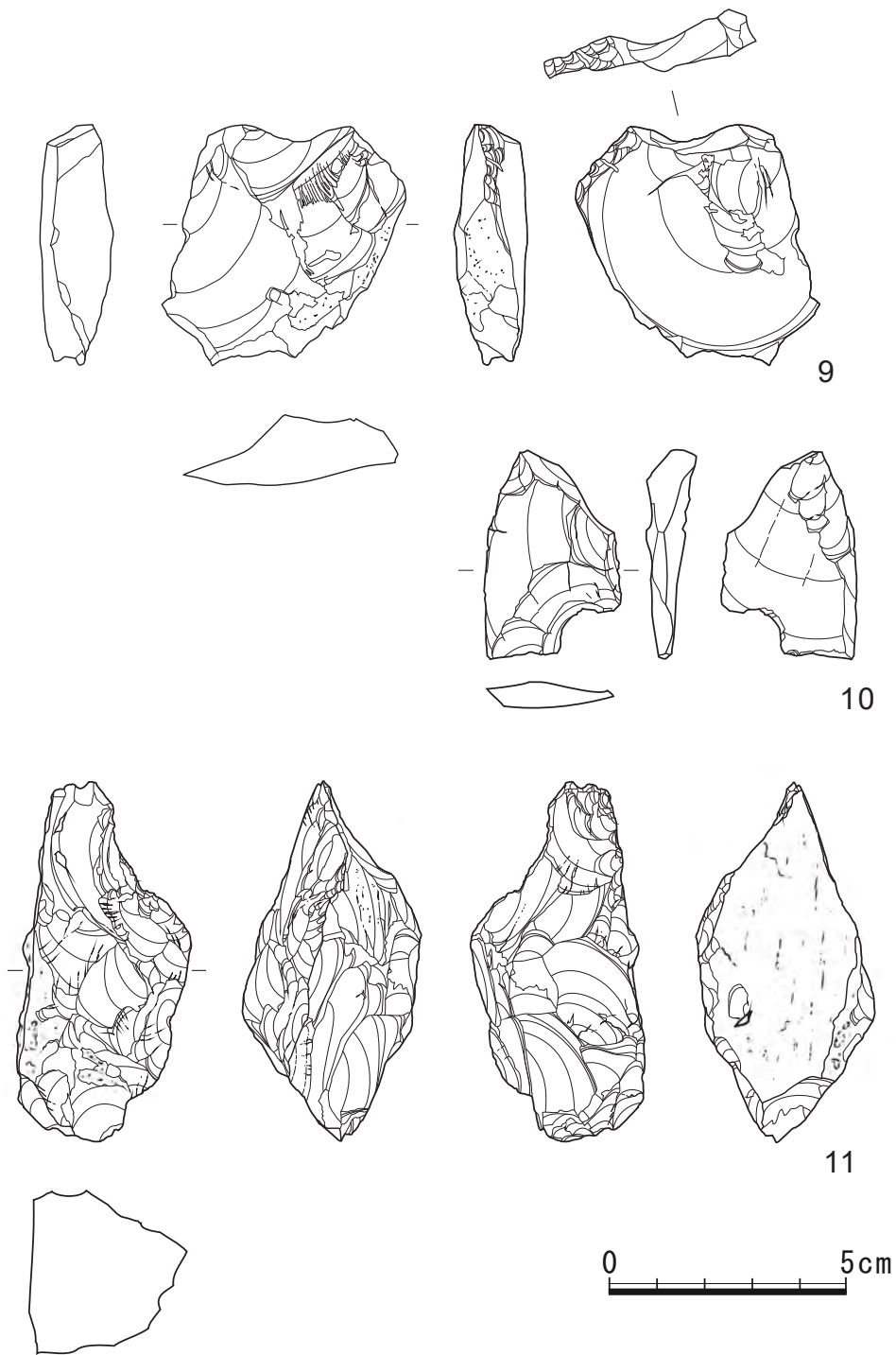
出土遺物は、槍先形尖頭器、ナイフ形石器、楔形石器、縦長剥片、剥片、石核がある。採集場所の詳細は不明であるため一括して報告する。石材は、槍先形尖頭器が安山岩製であるほかは、いずれも硅質凝灰岩製である。硅質凝灰岩は大きく2種類の石質が観察される。淡灰青色を呈し、硬質で風化の進んでいないものと、淡黄白色を呈し、やや珪化が弱いものである。後者は前者に比べて風化が進行しているものが多い。縦長剥片は基本的に前者の石材を利用しているが、1点のみ後者があつた。剥片は後者の石材を利用しており、石核は両者が認められる。

槍先形尖頭器（第2図1）第1地点出土資料である。両面加工品で、基部と思われる破片である。パティナの度合いは比較的浅く、暗青色の表面をしている。背面左半の剥離面は末端部で蝶番剥離気味に急角度で抜けているものの、全般的に平坦気味の剥離面で構成されている。残された範囲では、腹面→背面の順に形成を行っており、両面の縁辺部に細部調整を行って仕上げている。

ナイフ形石器（第2図2）背面左側縁下端部および背面右側縁下端部に調整加工を施している。両側縁の調整は、急角度であるが、素材が薄いため、トリミング状の調整となっている。左側縁の調整加工は素材面が急角度で、素材変形の度合いが低く、加工度が低い。素材の縦長剥片は、背面は基本的に主要剥離面と同一方向からの剥離面で構成されている。中央部の稜が高く、先行する剥離作業でも先細りの縦長剥片が剥離されていることを確認できる。複剥離打面で、バルブの発達は弱い。

楔形石器（第2図3）背面は上下を中心に左側面側から、腹面は右側面側からの加工によって成形を行っている（背面の上方からの剥離面は使用に伴うものである可能性もある）。腹面左半の大剥離面は使用に伴う截断面であるが、加撃が器体中心部に向かって伝わらなかったと推定され、器体の中央部付近から剥離している。腹面右半中央部の剥離面は平坦でリングの巻きが弱く、素材面の可能性がある。截断面剥離に伴って形成された縁辺を除くと、縁辺部縁辺のほぼすべてに使用によると考えられる潰れが認められ、背面は上半部、腹面はほぼ全体に細かな剥離面が生じている。背面左上半部中央に球果状の不純物が認められる。

縦長剥片（第2図4～8）加工痕ある縦長剥片を含めて説明する。縦長剥片は、長さ5 cm以下の小型品を主体とする。下端を欠損しているもの（5・8）は端部の形状が不明であるが、先細りの形態を主体とするようである。4は打面部を欠損している。バルブは残っ

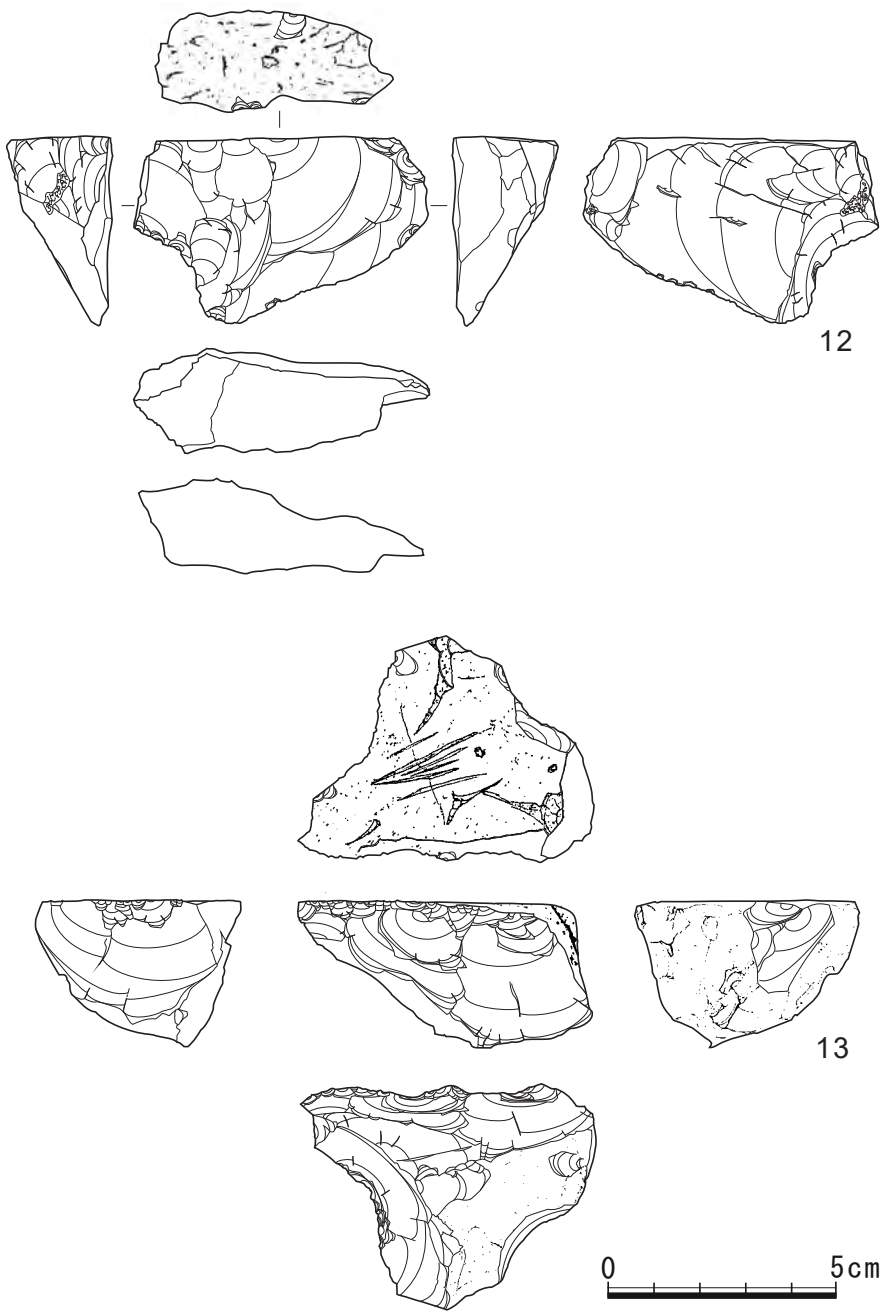


第3図 細谷遺跡出土の旧石器時代石器実測図(2)

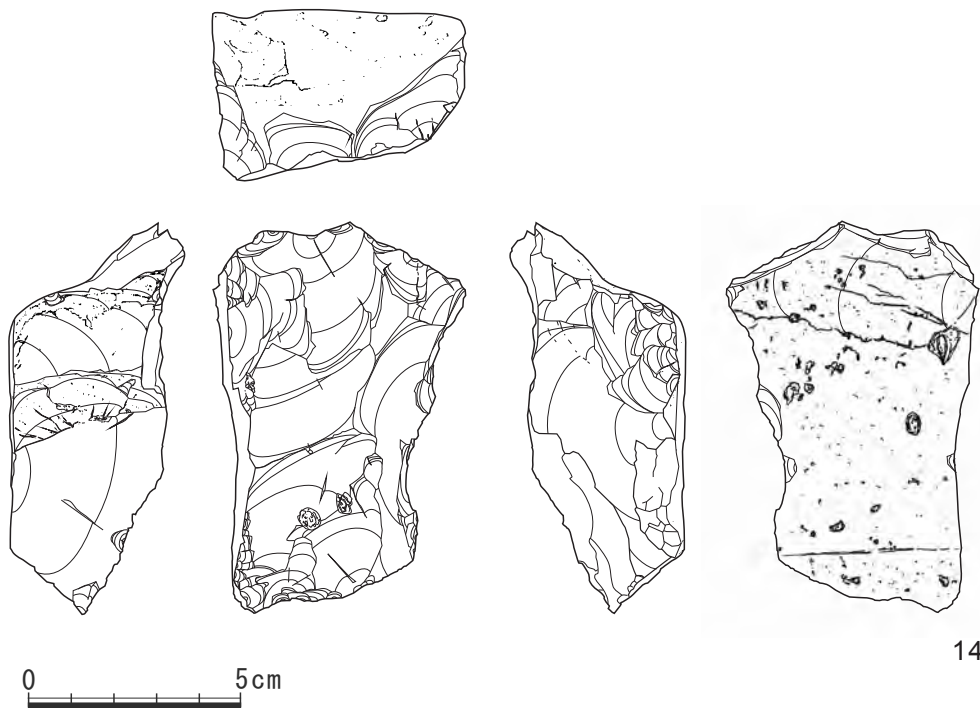
ており、発達は弱い。背面左半は左方向からの剥離面で構成されており、石核調整面と思われる。腹面下端に石核裏面側の剥離面が残されている。背面側の剥離面との角度からすると、比較的薄手の縦長剥片石核であったのかもしれない。5は下端部を欠損している。背面右半は中央の稜線付近を中心に自然面が残されており、自然面をえぐるように右下方からの剥離が行われている。その他は上方向からの剥離面で構成され、先行する剥離作業において小型で先細りの縦長剥片が剥離されていることを確認できる。背面右側縁上部に細かな調整加工が3面連続的に施されている。耕作によって部分的に欠損していることから剥離面の観察がやや困難であるが、急角度で調整されており、ナイフ形石器（第2図3）の基部加工の状態と共通する。複剥離打面で、バルブの発達は弱い。6は背面右半に広く自然面を残しており、円礫を利用している。打面部が剥離時に失われている。打面近くの縁辺は打面に向かって急速に幅を狭めており、打面はかなり小型であったと推定される。バルブは比較的発達しているが、打点近くに節理があり、節理に沿って剥離したため、蝶番剥離様に大きく段状剥離を起こしている。石質は、他の縦長剥片と異なり、やや白味が強く風化が進んでいる。やや軟質の石材と思われる。7は上半を欠損している。背面左半は自然面で、円礫を利用しているものと思われる。腹面下端に石核裏面の剥離面と思われる小剥離面が残されている。8は耕作により背面右側を欠損している。本剥片剥離時に上部を欠損したと推定される。上端部付近の厚さは0.4cm程度と薄く、下端では急速に厚くなっている。打点付近もかなり薄かったものと思われ、0.5cm前後と推定される。下端は節理面である。

剥片（第2図9・10）9はやや大型厚手の幅広剥片である。打面は大きく、バルブの発達は良好である。打面は大型の剥離面を中心に構成されている。石核の両面を剥片剥離作業に利用する石核から剥離されたものと考えられる。下端部は自然面で、円礫を利用している。10は下端部をわずかに欠損している。本剥片剥離時に背面左半を大きく欠損しており、ほぼ半分に分かれたものと推定される。9同様、元々は幅広の寸詰まりの形状であろう。腹面（主要剥離面）側は打点～バルブにかけて大きくはじけ飛んでいる。打面は大半が自然面で、円礫を利用している。

石核（第3図11、第4図12・13、第5図14）いずれも長幅比が1.0前後の不定形で幅広の剥片を主体として剥離している。11は背腹両面を剥片剥離作業面としている。左側面は平坦な節理面であるが、この面は打面としてはほとんど利用されておらず、背面右側縁側を中心に剥片剥離を行っている。背面、腹面、いずれかの面で一定の剥片剥離作業を行った後、反対側の面で剥片剥離を継続していると考えられ、廃棄直前には背面側で



第4図 細谷遺跡出土の旧石器時代石器実測図(3)



第5図 細谷遺跡出土の旧石器時代石器実測図(4)

数枚の目的剥片を剥離している。腹面上端部の右方向からの剥離面および下端部の下方からの剥離面は基本的に目的とする剥片の大きさに達していない。側面は上端及び下端が尖る形状を呈しており、使用痕は認められないものの、石器として利用するための調整であったのかもしれない。12は背面のほぼ全体と腹面の右端部で剥片剥離を行っている。背面は上側面の自然面を打面とする剥離面が広い面積を占めるが、大半は中央部から右半を占める1枚の剥離面である。推定される石核素材の厚さからみて3～4枚程度の剥片しか剥離されていないと考えられる。背面左側縁では背腹面で剥離作業を行っており、幅1.5～3cm程度の小型の剥片が剥離されている。背面右側面を利用した剥離作業も認められるが、剥離面が小さく、目的とした剥片は得られていないと考えられる。剥片素材の石核で、腹面に素材の主要剥離面が広く残されている。背面下部の左方向からの剥離面も素材面である。13は上側面の自然面を打面として、正面および左側面を剥片剥離作業面とする単設打面石核である。右側面はほぼ1枚の剥離面で構成されており、大型の剥片が剥離されている。背面は右端から左端まで細かな剥離が連続しており、削器に転用している。刃部角度は70～80度前後である。下側面右半～右側面に広く自然面が残されている。円礫を素材とする。14は大型の石核である。正面を主たる剥片剥離作業面として、3方向よ

り剥片剥離を行っている。上側面を打面として正面で剥離作業を行った後、打面を右側面に転位して、正面右半で剥離作業を行っている。さらに、打面を下側面に転位し、背面下半で剥離作業を行っている。正面下半の剥離作業では、最初の剥離では3.5 × 4 cm程度の剥片が剥離されているものの、その他は長さ2 cm以下の小型剥片の剥離のみで、基本的に目的とする剥片はほとんど剥離されることなく、遺棄されたと推定される。上側面の打面は3枚の比較的大きな剥離面で構成され、剥片剥離作業面としても利用された可能性があるが、正面の作業面と自然面は鋭角で交わっていると推定されることから、打面と剥片剥離作業面の角度を調整するための調整剥離面と理解できる。右側面、および下側面は自然面打面である。石核素材は分割礫で、左側面に分割面を広く残すとともに、裏面はほぼ全面自然面である。分割礫の素材は円礫である。

4. 出土石器の特徴と位置づけ

1) 出土石器の剥片剥離技術

出土石器は剥片剥離技術の面からみると、縦長剥片の剥離に関連するものと不定形で幅広剥片の剥離に関連するものがある。表面採集資料であるため共伴関係は不明であるが、剥片剥離技術の面でそれぞれ共通した特徴を指摘することができる。

剥片剥離技術は大きく3種類を認めることができる。第1は整った縦長剥片を目的剥片とするものである。3～8の縦長剥片が該当する。縦長剥片は、ナイフ形石器の素材を含

第1表 細野遺跡出土石器計測表

器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	挿図番号
1 槍先形尖頭器	1.55	2.05	0.65	1.5	安山岩	第2図1
2 楔形石器	3.65	2.60	1.50	12.0	珪質凝灰岩	第2図2
3 ナイフ形石器	4.65	1.65	0.80	5.0	珪質凝灰岩	第2図3
4 縦長剥片	3.35	1.35	0.50	1.8	珪質凝灰岩	第2図4
5 縦長剥片	3.75	1.70	0.60	4.1	珪質凝灰岩	第2図5
6 縦長剥片	4.65	2.10	0.95	3.9	凝灰岩	第2図6
7 縦長剥片	3.60	1.35	0.60	2.7	珪質凝灰岩	第2図7
8 縦長剥片	2.45	1.45	0.85	2.0	珪質凝灰岩	第2図8
9 剥片	5.05	5.10	1.50	35.3	珪質凝灰岩	第3図9
10 剥片	4.75	2.90	1.00	9.0	珪質凝灰岩	第3図10
11 石核	7.60	3.80	3.55	20.5	珪質凝灰岩	第3図11
12 石核	4.30	6.35	2.25	42.0	珪質凝灰岩	第4図12
13 石核	4.75	6.35	3.50	86.8	珪質凝灰岩	第4図13
14 石核	9.00	5.80	4.10	211.8	珪質凝灰岩	第5図14

めて、長さ3.5～5cm程度で、いずれも小型である。長幅比2.0以上で、確認できるものはいずれも先細りの形態である(3・4・6・7:数字は第2～5図に一致、以下同様)。打面が確認できるものは複剥離打面で、打面の大きさが確認・推定できるものはいずれも小型である(3～6)。バルブの発達は弱い。背面の剥離面は主要剥離面(腹面)の剥離方向と同一方向で、単設打面であり、背面稜線は縁辺とほぼ平行し、整った形態である。また、背面稜線のうち2本が背面下半で1点に収束し1本となる例(3・5)があり、収束点付近がもっとも厚くなっている。縦長剥片を剥離した石核は出土していないが、上記の特徴から、剥片剥離作業面の上面観は中央部付近に頂点をもつ多角形状を呈し、石核下端部が先細りとなる形態が想定される。側面方向からの剥離面が認められる資料(4)があり、石核成形調整が行われている可能性がある。背面に広く自然面を残すものがあり(5～7)、分割礫、または礫素材と考えられる。また、剥片剥離工程の比較的初期段階から行っていると想定される。いずれも珩質凝灰岩を利用しており、6を除き、いずれもやや青味のある珩酸分の多い石材である。6は淡黄白色の珩質凝灰岩で、やや軟質である。

第2は長幅比1.0前後の幅広の剥片を目的剥片とするもので、打面転位を行う。9・10の剥片と11・12・14の石核が該当する。90度または180度の打面転位を行っているが、背腹面で打面と剥片剥離作業面を反転する場合が多い。分割礫素材(11・14)と剥片素材(12)が認められる。また、14は正面側を主体に剥片剥離を行っており、後述する第3の剥片剥離技術との中間の様相を示す。淡黄白色の珩質凝灰岩を利用しており、剥片はやや風化が進んでおり、やや軟質である。

第3は長幅比1.0前後の幅広の剥片を目的剥片とするもので、幅広の縦長剥片も剥離されているようである。13の石核が該当する。90度または180度の打面転位を行う。打面は平坦な自然面を利用しており、打面調整、石核調整は施さない。礫または分割礫を素材としていると推定される。淡青灰色で珩酸分の多い珩質凝灰岩を利用している。

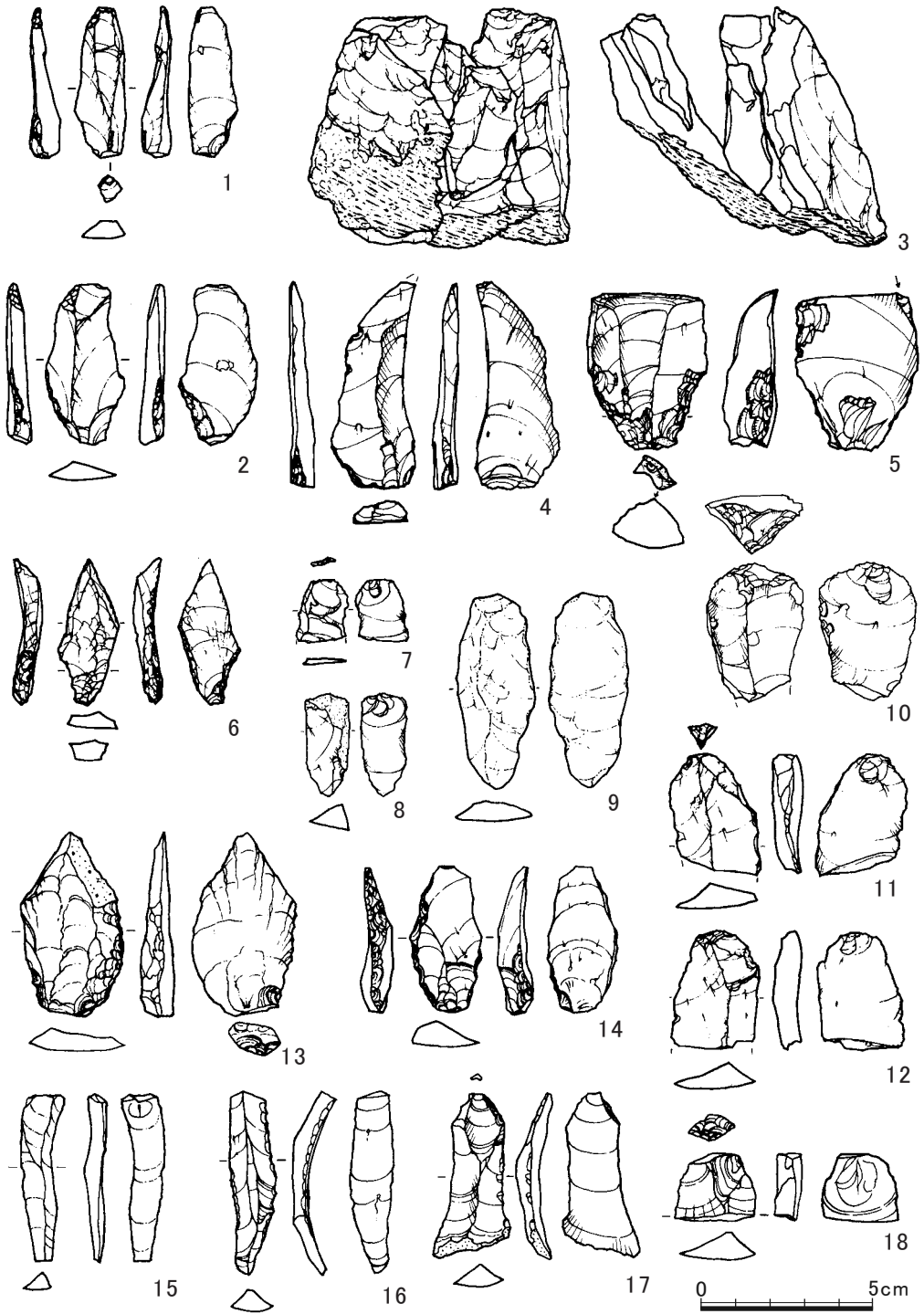
2) 西南日本の石器群からみた出土石器の位置づけ

次に本遺跡出土資料の時期について考えてみたい。ナイフ形石器および剥片剥離技術の特徴が時期的な位置づけを考察する上で参考となろう。ナイフ形石器は整った先細りの縦長剥片を素材としており、加工度がやや弱いものの、基部加工ナイフ形石器と評価されるものである。本遺跡の場合表面採集であることから共伴関係を確認することはできないが、ナイフ形石器と縦長剥片の特徴は一致しており、同一時期の所産と仮定して検討を進める。

まず、縦長剥片素材の基部加工ナイフ形石器について、周辺地域を中心に概観してみると、中国山地西部では、広島県冠遺跡D地点第II文化層(藤野1992)、樽床遺跡群

G地点（梅本・児玉・三枝ほか1986）がある。冠遺跡D地点（第6図1～3）は安山岩を主要石材とし、AT上位の第Ⅲ層から縦長剥片素材の基部加工ナイフ形石器とともに横長剥片素材の二側縁加工、切り出し状のナイフ形石器、角錐状石器が出土した。基部加工のナイフ形石器は長さ5cm以下の小型品で、細身で先細りの縦長剥片とともにやや幅広く先端が平坦気味の縦長剥片を素材としている。素材打面周辺および素材末端のいずれか片方の縁辺調整加工を施しており、素材の変形度は比較的弱く、打面は残置している。また、主要剥離面側の基部加工はやや緩やかな角度で加工していることが特徴である。縦長剥片剥離技術は分割礫を石核素材とし、分割面、自然面を打面とする非調整打面を基本とし、先細りの形態、先端が平坦気味あるいは平坦な形態のいずれも製作されている。樽床遺跡群G地点は表面採集資料であるが、出土石器群の特徴から同一時期の石器群と推定されるものである（第6図4～12）。黒曜石、安山岩を主要石材とし、縦長剥片素材の基部加工ナイフ形石器、搔器、縦長剥片を特徴とする石器群である。1点であるが、AT上位の黄褐色土層～漸移層下部から搔器が断面採取されている。基部加工ナイフ形石器は整った縦長剥片を利用しており、素材打面の背面両側縁に調整加工を施している。素材打面を残置しており、素材の変形度からみて素材打面は比較的中小型と推定される。先端部が確認できるものはいずれも先細りの形態である。縦長剥片剥離技術は、小型～中型の縦長剥片を製作している。先細りの形態と先端が平坦気味あるいは平坦な形態が認められる。打面は幅広く大型のものと小型のものがあり、後者は黒曜石製を中心に打面細部調整が認められるものが多い。石核は剥片、分割礫素材と推定され、平坦打面のものが多く、先細りの縦長剥片を連続的に剥離しているものと先端が平坦な形態のものを合わせて剥離しているものの両者が認められる。

この他に、冠遺跡群において縦長剥片剥離技術が出土石器群の中で一定量を占める石器群として、冠遺跡B地点（梅本1983）、冠遺跡39G・52G（岩井・久下2001）等がある。冠遺跡B地点は安山岩を主要石材として、横長剥片素材のナイフ形石器、角錐状石器を特徴とする石器群である。第Ⅲ層出土で、縦長剥片石核は大型厚手の剥片、分割礫を素材とし、素材の小口部を剥片剥離作業とするものが多い。先細りの縦長剥片を製作しているが、非調整打面を基本とし、石核調整も乏しい。縦長剥片の打面は調整打面であるが、広めである。冠遺跡39G・52Gは第Ⅲa層から横長剥片・同石核とともに縦長剥片素材の側縁加工ナイフ形石器、縦長剥片が出土している。縦長剥片は長さ7～10cm前後の中型を主体とする。先細りの形態と先端が平坦な形態の両者があり、前者は打面が小型のものが多い。調整打面を基本とし、打面再生などの石核調整が認められ、単設打面と両



第6図 中国山地の基部加工ナイフ形石器を主体とする石器群

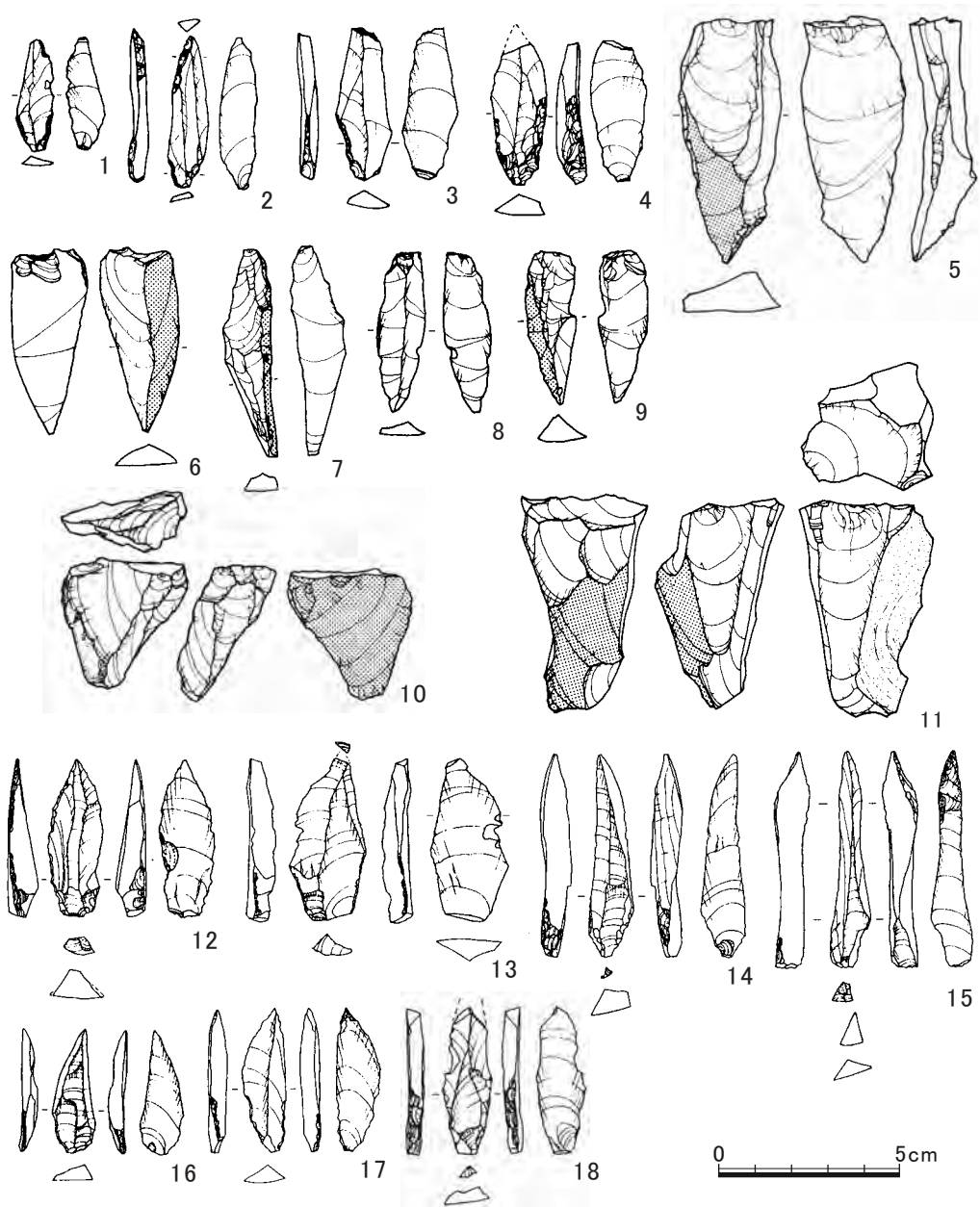
(1～3. 冠遺跡D地点第Ⅱ文化層、4～12. 樽床遺跡群G地点、13～18. 野津三第1遺跡)

設打面がある。石核は分割礫、厚手大型の剥片を素材とし、剥片や比較的扁平な素材の小口部に剥片剥離作業面を設定する石核は先細りの縦長剥片を連続的に剥離している。

日本海沿岸を含めた中国山地東部では、発掘調査資料ではないが、鳥取県野津第三1遺跡（第6図13～18）で縦長剥片素材の基部加工ナイフ形石器、縦長剥片が出土している（稲田・日野1993）。表面採集資料であるが、採集地点の状況から弥山軽石層より上位の堆積層に包含されていたと推測され、時期がかなり限定できる資料である。黒曜石、安山岩を主体とする石器群である。基部加工ナイフ形石器は長さ5cm以下の小型品で、先細りの縦長剥片を素材としている。素材打面の背面両側に調整加工するものと素材打面の周辺のみだけでなく片方の縁辺のほぼ全体を調整するものがある。縦長剥片は黒曜石製が中型、安山岩製が中・大型を主体とし、先細りの形態が多く出土している。複剥離打面で、小型の打面を有する者が多い。バルブの発達も比較的弱いものが多い。

中国山地東部では、岡山県恩原2遺跡S文化層（稲田編1996）、兵庫県板井寺ヶ谷遺跡下位文化層（山口編1991）などで基部加工ナイフ形石器が散見されるが、他の形態のナイフ形石器が主体で、いずれも1、2点程度伴っているにすぎない。恩原2遺跡はAT上位のソフトローム層で出土の石器群で、先細りの縦長剥片も出土しているが、末端が平坦な形態の縦長剥片も同一の石核から剥離されていると考えられ、打面が広く大きいものが多い。板井寺ヶ谷遺跡はAT下位の黄色粘土層から出土した石器群で、非調整打面を基本とし、打面転位を頻繁に行っている。幅広の縦長剥片が多く、整った形態は少ない。打面の形状は多様で、小型のものも少なくない。

隣接する九州地方に目を転じると、西北九州地方では佐賀県枝去木中山遺跡（田島編著1990）などで基部加工ナイフ形石器剥片が散見されるが、剥片尖頭器を除くと、二側縁加工ナイフ形石器、台形石器、台形様石器が主体で、基部加工ナイフ形石器は稀な存在である。東九州地方では、大分県岩戸遺跡第3次調査6層上部（清水・高橋・柳田編著1986）、前田Ⅲ遺跡（綿貫・高橋・清原1989）などで基部加工ナイフ形石器を主体とする石器群が検出されており、AT上位のハードローム層上半～ソフトローム層から出土している。岩戸遺跡（第7図1～11）の基部加工ナイフ形石器は先細りの縦長剥片を利用し、素材打面の両側縁を主体に先端部のいずれか片方の縁辺に調整加工するものがある。縦長剥片剥離技術は2種類の素材が指摘されている（柳田1986）。礫の一端もしくは対応する反対側の2ヶ所を打面とし、打面側に最大の厚さを有するもの（I-a類）と剥片素材で素材小口部を主体に剥片剥離作業面を設定し、先細りの縦長剥片を製作するもの（I-b類）である。I-b類を主体としており、ナイフ形石器の素材に利用されてい



第7図 東九州地方の基部加工ナイフ形石器を主体とする石器群
 (1～11. 岩戸遺跡第3次調査第6層上部、12～18. 前田Ⅲ遺跡第Ⅻ層)

る。前田Ⅲ遺跡(第7図12～18)の基部加工ナイフ形石器も先細りの縦長剥片を利用し、長幅比3.0以上の細身の形態が含まれている。素材打面両側縁の調整加工を主体としており、素材末端部に調整を施すものは少ない。また、ブランディングのみならずトリミング状の細かな調整加工を主体とするものも認められる。岩戸遺跡同様、2種類の縦長剥片剥離

技術の存在が指摘されており、岩戸遺跡のⅠ－a類に対応する技術はすべて縦長剥片に頭部調整が認められることが指摘されている（綿貫 1989）。基部加工ナイフ形石器の素材の多くは岩戸遺跡のⅠ－b類による縦長剥片が主体的に利用されている。

中九州および南九州では、基部加工ナイフ形石器はAT 上位層で確認できる。鹿児島県桐木耳取遺跡Ⅰ文化層12 エリア（岩戸・大保・真鍋・長野・真鍋・元田・吉井 2005）などの剥片尖頭器を特徴とする石器群、鹿児島県城ヶ尾遺跡第Ⅲ文化層（有馬・長野・馬籠 2003）などの角錐状石器を特徴とする石器群やそれらの石器群を前後する時期である。桐木耳取遺跡の基部加工ナイフ形石器は幅広く先細りの縦長剥片を素材としており、素材打面の背面両側に調整加工を施すもので、今峠型を伴っている。素材背面の剥離面は必ずしも腹面の打撃と同一方向ではない。城ヶ尾遺跡第Ⅲ文化層の基部加工ナイフ形石器は調整加工が素材打面周辺のみのもは少なく、素材下半まで調整加工が及ぶものも多く、打面を除去して基部を尖らせている資料がかなりある。宮崎県南学原第1 地点（山田 2002）など先細りで細身の縦長剥片を素材とする基部加工ナイフ形石器が主体となる石器群も認められるが、包含状態が良好な石器群に乏しい。

東日本に目を転じると、後期旧石器時代前半期においても縦長剥片素材の基部加工ナイフ形石器を特徴とする石器群を認めることができる（藤野 2004）。後期旧石器時代後半期では、杉久保型ナイフ形石器、東山型ナイフ形石器とこれに関連すると考えられる基部加工ナイフ形石器を特徴とする石器群が東北地方～中部地方北半、関東地方に広く分布する。とくに、東日本では整った縦長剥片（石刃）を素材とする基部加工ナイフ形石器が各時期にわたって存在することが特徴である。

以上、概観したように、縦長剥片素材の基部加工ナイフ形石器を特徴とする石器群は列島の複数の時期に存在することが知られるが、関連遺跡の分布の現状から中国地方以西の西日本の中で類例を求めることが適当であろう。まず、本遺跡が位置する中国山地であるが、後期旧石器時代後半期の複数の時期で確認することができた。冠遺跡 D 地点第Ⅱ文化層は第Ⅱ期後半、樽床遺跡群 G 地点は第Ⅲ期前半、野津三第1 遺跡は第Ⅲ期後半に位置づけられる（藤野 2006）。本遺跡の資料は、形状の点では冠遺跡 D 地点に近いものがあるが、本遺跡の場合、トリミング状の細かな調整を主体としており、上記の中国地方の石器群の中で類例を見ることはできない。縦長剥片剥離技術についても直接対比できる石器群を欠いている。隣接の九州地方に類例を求めると、東九州地方の岩戸遺跡第6 層上部、前田Ⅲ遺跡に共通した様相を見ることができる。形状については東九州地方の基部加工ナイフ形石器はの範疇に含まれており、トリミング状の調整加工も認めることができる。

整った先細りの縦長剥片が連続的に製作されており、打面の形状や打面調整も基本的に共通した様相を認めることができる。東九州地方の石器群では剥片素材の石核を主体に縦長剥片を製作しているが、本遺跡では石核素材については不明である。これらの東九州地方の石器群は、中・四国地方の第Ⅲ期（前半）に位置づけられ、時期的には、西中国山地では冠遺跡 A 地点、樽床遺跡群 G 地点に対比されるものである。

本遺跡では、ナイフ形石器、縦長剥片のほかには、長幅比 1.0 前後の幅広剥片、打面転位を行う石核などがある。幅広剥片は打面転位石核を主体にから剥離されたものと推定され、同一時期の所産と想定して、考察を進める。打面転位石核の技術的特徴は、対岸の天子遺跡の出土資料と基本的に共通している。本遺跡の場合、ナイフ形石器、縦長剥片が出土しており、両者の関係が問題となるが、基本的に石質を異にしていることなどから、ここでは別時期の所産と想定しておきたい。天子遺跡の石器群も表面採集資料であるが、出土資料が同一時期と仮定した場合、後期旧石器時代前半期前半（第Ⅰ期後半）に位置づけられるとした（藤野 1988）。現状においても基本的に位置づけを変更する必要はないが、本遺跡の場合、幅広の縦長剥片の製作が不明確である。採集されていないだけなのか、にわかには判断できないが、本来の組成に含まれないとすると、天子遺跡よりも古い様相を示していると言える。

5. おわりに

西中国山地に位置する細野遺跡採集の遺物のうち、旧石器時代の所産と考えられる石器について紹介した。本遺跡の資料は天子遺跡に次いで鹿野盆地における 2 例目の旧石器時代資料となった。山口県における旧石器時代遺跡は県西南部の沿岸部に位置する宇部台地において多数の遺跡が集中的に分布しているが、中国山地では山口市毛割遺跡（藤野 1983）など山口盆地およびその周辺で数遺跡が知られるにすぎず、中国山地西端部における数少ない資料である。毛割遺跡を除くと、ナイフ形石器などの単独資料、もしくは数点の遺物が採集されている状況であり、本遺跡は貴重な資料と言える。

本遺跡では縦長剥片素材のナイフ形石器、縦長剥片が出土しており、東九州地方との関連が窺われた。宇部台地などの山口県西南部は九州北部と隣接する地域であり、西北九州地方の石器群と関連をもつ石器が多数出土しているが、隣接する東九州地方と関連する石器群はほとんど明らかでなかった。しかし、日本海側に位置する阿武郡阿武町福賀森遺跡（下瀬・沖 1997）で東九州地方を中心に分布する今峠型ナイフ形石器が出土している。本遺跡を含め、隣接する東九州地方との関連資料が追加されたことは重要である。本

遺跡および天子遺跡で利用されている石材は凝灰岩で、遺跡からそれ程遠くない場所で採取されたものと想定される。後期旧石器時代後半期では安山岩、黒曜石などの広域石材が広く利用されている。中国山地西部では冠山安山岩が多くの遺跡で利用され、量的にも主体的な割合を占めていると想定される。一方、愛媛県肱川流域では地元の赤色珪質岩が主体的に利用され続ける例も知られている。先に触れた宇部台地の遺跡では西北九州系統の石器群とともに安山岩を利用した瀬戸内系石器群が多数出土しており、少数ではあるが、隠岐産黒曜石を利用した石器も出土している。安山岩の産地分析は行われていないが、肉眼的には冠山安山岩と共通した特徴をもつ石材が多数利用されている。本遺跡や天子遺跡が位置する鹿野盆地は錦川の上流域に位置し、冠遺跡群から宇部台地に至るルートの一つとして想定可能な地域である。しかし、鹿野盆地では安山岩を利用した旧石器時代遺物はほとんど出土していない。後期旧石器時代の集団領域や移動ルートを考える上で貴重な資料を提供していると言えよう。

本稿に使用した実測図は、藤野と山手が分担して作成し、藤野が浄書した。「3. 出土遺物」は藤野・山手が、その他は藤野が担当した。本稿を作成するにあたり、石材について中村由克氏（下仁田自然館館長）から貴重なご意見を賜った。記して感謝したい。

註

- (1) 宮本氏は頁岩としており、天子遺跡においてもそれに従って頁岩と報告した。しかし、広島県に広く分布する高田流紋岩類に類似する石材であることから、下仁田自然史館中村由克氏に意見を求めた。予備的な鑑定であるが、凝灰岩とする方が良いとの意見を頂いている。今後、本格的な岩石的な検討を行う予定である。
- (2) 縄文・旧石器時代の遺物は北側の段丘を主体に採取されており、中心となる分布域を示すため、第1図は天子遺跡出土の旧石器時代遺物を報告した1988年時点の遺跡名および位置を示している。

引用文献

- 有馬孝一・長野眞一・馬籠亮道 「旧石器時代の調査」『城ヶ尾遺跡 東九州自動車道建設（末吉IC～国分IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 旧石器編』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書60、鹿児島県立埋蔵文化財センター、18～241頁
- 稲田孝司・日野琢郎 1993 「鳥取県関金町野津三第1遺跡の石器群」『岡山大学文学部紀要』第19号、85～96頁
- 稲田孝司編 1996 『恩原2遺跡』恩原遺跡調査団
- 岩井重道・久下実 2001 「発掘調査の概要」『冠遺跡群Ⅷ 一冠遺跡群発掘調査事業最終報告書』広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター、13～75頁
- 岩戸孝夫・大保秀樹・長野眞一・真鍋雄一郎・元田順子・吉井秀一郎 「2005 ナイフ形石器第Ⅰ文化層の調査」『桐木耳取遺跡 東九州自動車道建設（末吉財部IC～国分IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ 旧石器時代～縄文時代草創期編』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書91、鹿児島県立埋蔵文化財センター、14～238頁

- 梅本健治・三枝健二 1983 「冠遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』広島県教育委員会、131～347頁
- 梅本健治・児玉集・三枝健二・柴田喜太郎・辻満久 1986 『樽床遺跡群の研究』芸北町教育委員会
鹿野町教育委員会 1993 『鹿野町の遺跡～鹿野町遺跡詳細分布調査の結果から～』
- 清水宗明・高橋信武・柳田俊雄編著 1986 『岩戸遺跡 大分県大野郡清川村所在旧石器時代遺跡第3次発掘調査報告書』清川村教育委員会
- 下瀬洋一・沖憲明 1997 「山口県阿武町福賀森遺跡採集の遺物」『旧石器考古学』55、61～67頁
- 田島龍太編著 1990 『中山枝去木遺跡―枝去木幹線水路建設に伴う文化財調査報告― 唐津市文化財調査報告書第30集』唐津市教育委員会
- 藤野次史 1983 「旧石器時代の遺物」『毛割遺跡』山口市文化財調査報告第18集、山口市教育委員会、1～10頁
- 藤野次史 1992 「広島県冠遺跡D地点第2次調査の概要について」『広島大学文学部内海文化研究紀要』第21号、広島大学文学部内海文化研究室、1～24頁
- 藤野次史 1988 「山口県都濃郡鹿野町天子遺跡採集の石器」『旧石器考古学』36、81～89頁
- 藤野次史 2004 「後期旧石器時代前半期石器群と地域性の成立」『中・四国旧石器文化談話会20周年シンポジウム 中・四国地方旧石器文化の地域性と集団関係』中・四国旧石器文化談話会、231～246頁
- 藤野次史 2006 「中・四国地方、近畿地方の編年」『旧石器時代の地域編年の研究』同成社、173～206頁
- 柳田俊雄 1986 「考察」『岩戸遺跡 大分県大野郡清川村所在旧石器時代遺跡第3次発掘調査報告書』清川村教育委員会、54～71頁
- 山口卓也編 1991 『多気郡西紀町板井寺ヶ谷遺跡―旧石器時代の調査― 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XIV-1』兵庫県教育委員会
- 山田洋一郎 2002 「南学原第1遺跡」『南学原第1遺跡・南学原第2遺跡 一般県道福王寺佐土原線道路改築事業(船野工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第50集、宮崎県埋蔵文化財センター、5～63頁
- 綿貫俊一 1989 「前田Ⅲ遺跡の調査、まとめ」『横枕B遺跡・前田遺跡 大分県直入郡直入町所在遺跡の発掘調査報告書』直入町教育委員会、114～227頁
- 綿貫俊一・高橋信武・清原史代 1989 「前田Ⅲ遺跡の調査」『横枕B遺跡・前田遺跡 大分県直入郡直入町所在遺跡の発掘調査報告書』直入町教育委員会、219～227頁

挿図引用文献

- 第6図 1～3. 藤野 1992を一部改変、4～12. 梅本・児玉・三枝・柴田・辻 1986、13～18. 稲田・日野 1993
第7図 1～11. 清水・高橋・柳田編著 1986、12～18. 綿貫・高橋・清原 1989を一部改変

Paleolithic stone tools from the Hosono Site in Shunan city, Yamaguchi prefecture

Tsugifumi Fujino, Takao Yamate

Hosono site is a complex archaeological sites ranging from the Paleolithic Age to the Middle Ages. This sites situated at the upper stream of the Nishiki River in the Chugoku Mountains. This sites is located on a river terrace with an altitude around 255 m.

In this paper, we report on the Palaeolithic stone tools from Hosono site. These Paleolithic stone tools mainly consisted of tuff, and can be roughly classified three periods. The first is a stone spear head, which is positioned at the end of the Upper Paleolithic Age – the early Jomon Age. The second is a knife blade and a blade, which is positioned in the second half of the Upper Paleolithic Age. These stone tools are close relation with stone tools of the eastern Kyushu district. The third is a wide flake, a core, which is positioned in the first half of the late Paleolithic Age. The stone tools collected from this site are important materials for considering the use of raw materials for stone tools and the relations of human group in the Upper Paleolithic Age in Southwest Japan.

図版1 細野遺跡と周辺の地形



1. 細野遺跡遠景：天子遺跡から細野遺跡を望む（北西より）



2. 鹿野市街地遠景：旧細野遺跡第2地点から鹿野市街地を望む（南より）

図版 2 細野遺跡と周辺の地形 (2)



1. 旧細野遺跡第1地点遠景：天子遺跡より望む（北より）



2. 旧細野遺跡第2地点遠景：天子遺跡より望む（北より）



3. 旧細野遺跡第1地点近景（南より）



4. 旧細野遺跡第2地点近景（南より）

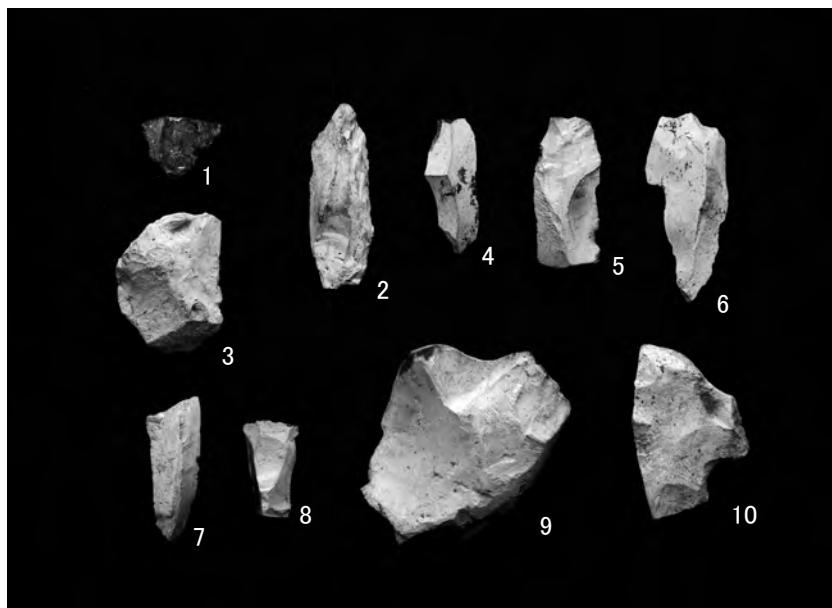


5. 細野遺跡背後の山並み遠景：旧細野遺跡第1地点より望む（北西より）
※山裾の竹林・杉林は高位の平坦面



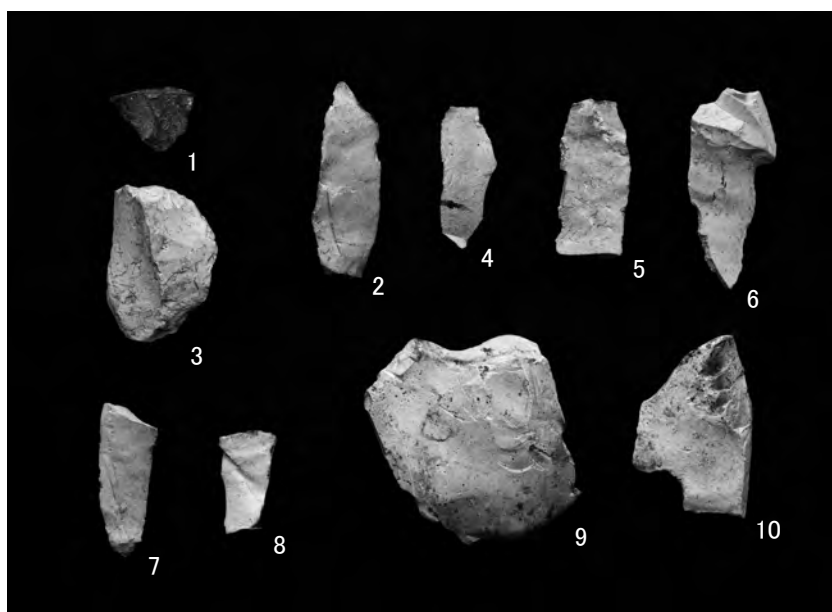
6. 鹿野市街地遠景：細野遺跡東側の段丘より望む（南より）

図版 3 細野遺跡出土の旧石器時代石器 (1)



1. 出土石器 (背面)

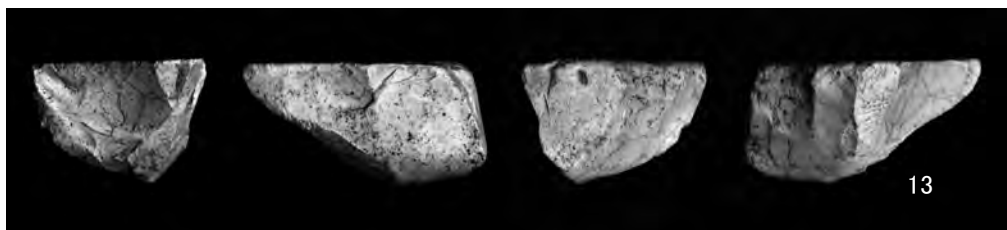
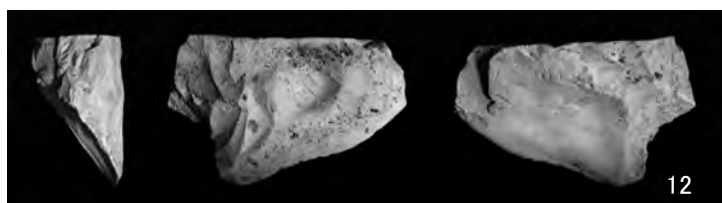
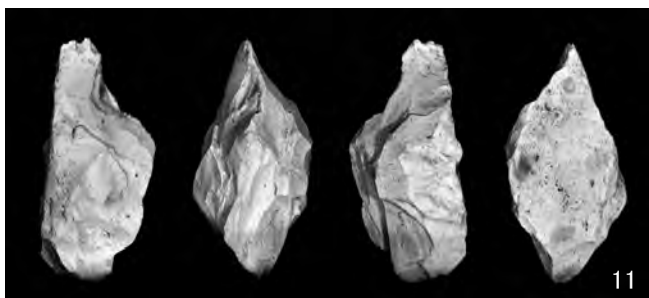
(1. 槍先形尖頭器、2. ナイフ形石器、3. 楔形石器、4～8. 縦長剥片、9・10. 剥片)



2. 出土石器 (腹面)

(1. 槍先形尖頭器、2. ナイフ形石器、3. 楔形石器、4～8. 縦長剥片、9・10. 剥片)

図版 4 細野遺跡出土の旧石器時代石器 (2)



1. 出土石器 (11 ~ 14. 石核)